

指導が重要と考えられた。

6 C型慢性肝炎に対する Peginterferon/Riba-virin/Telaprevir (PEGIFN/RBV/TVR) 3剤併用療法患者における SF-36 を用いた健康関連 QOL の検討

鈴木 光幸・佐久間 愛・石川 達*
阿部 聡司*・吉田 俊明*・阿部 弘子**
小山富士子**・中野ともみ**
植木 文**・長谷川江梨名**
野口 博人**・深澤 尚子**
丸山 由華**・廣澤 宏**

済生会新潟第二病院薬剤部
同 消化器内科*
同 肝臓病教室**

【目的】C型慢性肝炎における1型高ウイルス量患者において PEGIFN/RBV/TVR3 剤併用療法を施行した患者に対して、包括的尺度の代表として広く利用されている SF-36 を用いた QOL への影響について検討した。

【方法】対象は3剤併用療法を施行し長期経過観察し得た29例(男性16名,女性13名)。投与開始後2週間程度入院観察を行い、その後は外来治療を継続しながらの調査とし、評価ポイントは、投与前,2週間後,3か月後,6か月後,1年後の計5ポイントとして SF-36 を用いた QOL アンケート調査を行った。

【結果】男女共に TVR 投与期間において身体的健康は低値を示す傾向がみられ、身体機能 (PF) では男性において治療終了後に有意にスコアの上昇が見られた。精神的健康は年齢、性別、過去治療歴別で比較したが大きな影響はみられなかった。

【考察】TVR 併用期間は、貧血症状や皮膚症状が出現する頻度が高いため、身体的健康で男女共にスコアの低下が認められている。この期間の副作用マネジメントは特に注意が必要である。

7 balloon-TACE 後早期に多発肺転移をきたした肝細胞癌の1例

和栗 暢生・五十嵐俊三・小川 雅裕
小川 光平・倉岡 直亮・佐藤 宗広
相場 恒男・米山 靖・古川 浩一
杉村 一仁・五十嵐健太郎

新潟市民病院消化器内科

【緒言】肝細胞癌に対するバルーン閉塞下 TACE (B-TACE) は選択的に供血動脈を閉塞することで腫瘍部により強く薬剤を集積させることで治療効果を上げる。当科では、(1) DSA で腫瘍染色影が淡い、薬液易逆流性など、従来法 TACE では効果を期待できない症例、(2) TACE 不応あるいは易再発症例、を対象に B-TACE を適用しはじめた。今回 B-TACE 後早期に多発肺転移を生じた症例を経験し、ここに報告する。

症例は66歳,男性。アルコール性肝硬変を背景に3年9か月前に stage IV-A (門脈左枝 Vp3) の肝細胞癌で初診。リザーバー肝動注化学療法 (low-dose FP) を施行し、PR~SD にて1年8か月継続したが、PD に転じた。sorafenib 内服を行いながら、Lipiodol-TAI などを反復したが、肝内病変の進行のため、B-TACE の方針となった。左葉外側域原発巣+Vp3 および S8 頂部、右葉に小濃染多発の状態であった。A8, A1-4, 左肝動脈の3ヶ所で Miriplatin および Gelpart を用いて B-TACE を施行した (LOGOS 使用)。術後経過良好で退院したが、治療2ヶ月時より息切れと咳嗽が出現し、多発肺転移を指摘された。進行は早く、間もなく呼吸不全に陥り、B-TACE から83日で永眠された。

【考察】急速に致死的多発肺転移を生じたことは、癌終末期にしばしばみられる生物学的悪性度の急激な変化によるとも考えられるが、門脈腫瘍栓合併状態での B-TACE による圧入が腫瘍細胞を肝静脈へと押し込む機序が最も推測された。今後は B-TACE 施行例の蓄積と十分な評価が必要であるが、本例の経験が多く共有できれば幸いと考えている。